昔　話　パル　スィ

ふぐるま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

昔　話　パル　スィ

【Ｎコード】

Ｎ９１７２Ｊ

【作者名】

ふぐるま

【あらすじ】

昔々あるところにってやつです。

（前書き）

多少キャラ崩壊ありです。
あと、書き下ろしです。

昔々あるところに普通の爺さんとパルスィが居りました。
ある日パルスィが買い物に出ると、隣の正直爺さんと出会いました。
会いたくない奴に会ってしまった。

パルスィはこのお爺さんの事が大嫌いなのです。
「やあこんにちはパルスィちゃん。この前お裾分けしてくれた肉じゃが、とても不味かったよ。感謝はしない」
正直爺さんは思ったことを何でも正直に言うのでどうにも苦手です。
「どうも正直な感想ありがとう御座います。次から余ったら肥溜めに捨てるとするわ」
早々に話を切り上げて逃げ出そうとするとお爺さんの懐から何かが転がり落ちました。
金塊です。
どうやって懐に入れていたのか不思議になる位大きな金色の塊が零れ落ちたのです。
目を丸くしているパルスィに正直爺さんはことの経緯を話し始めました。
どうやら飼っている犬が「ここ掘れワンワン」と奇妙な鳴き声を上げたので掘ってみたところ金銀財宝がザックザク……という事です。
お金持ちになるなんて、妬ましい。

こうしてはいられません。
別れの挨拶もそこそこにパルスィは家へと急ぎました。

「だからお爺ちゃん！欲しくないの？便利な犬！」
かれこれ2時間。卓袱台を叩きながらパルスィの必死の説得が続いています。
「じゃがな。パルスィよ、わしは今の生活に満足しておる。食っていくのに必要なだけ金はあり、こんな老いぼれの面倒を見てくれる可愛いお前もいる。これ以上何を望む事があるだろうか」
優しげな微笑を浮かべながら動こうとしないお爺さんにパルスィのイライラは募るばかりです。
富をもたらす幸せの犬が、他の誰かならいざ知らず、よりによって自分の一番嫌いな人物の下に居るのです。
これが妬まずにいられましょうか。
いや無理です。

仕方ない。奥の手よ。

「お爺ちゃんは優しいわ。
　とても　きれいな人。
　　でも　　欲も無い。
　　何　　故
そんな
　　貴方に
どう　して　　神　様　は
幸せを下さらないの？
　　悔　し　　くない？
　何　もし　な　いで
　　欲に塗れた隣人　が
妬　ま　し　く　な　い　？」

能力発動。

お爺さんの嫉妬心をこれでもかと言うほど煽ります。
柔和に微笑んでいたお爺さんが見る見るうちに修羅の形相へと変貌していきます。
ギシギシと歯軋りをして、手のひらに爪が食い込むほど拳を固めています。
体がわなわなと震え出して……爆発するような勢いで家を飛び出して行きました。
今度はパルスィが微笑みました。
隣の正直爺さんに仕返しが出来てとても嬉しいのです。
5分と経たずにお爺さんは帰ってきました。
左手に犬を鷲掴みです。
「よし！早速掘らせるぞ！」

～30分後～

犬が掘り出したのはゴミに毒虫、死体に妖怪。
お爺さんとパルスィはほうほうの体で逃げ出しました。
阿鼻叫喚の地獄絵図と化した庭を眺めながらパルスィは親指の爪を噛みます。

この犬畜生めが。

「ごめんなさい正直爺さん。貴方の犬は走り回っている時に、偶然、眉間に五寸釘が刺さって死んでしまいました」
死んだ犬の首根っこを持ってパルスィは深々と頭を下げます。
「何が偶然だ、嘘吐け小娘。ああ悲しい、もう楽して金は手に入らないのか……」

なんて心の醜い奴！

自分のことは棚上げです。

〜数日後〜

買い物帰りのパルスィがまたまた正直爺さんと出会いました。

「やあ小娘（ガキ）。この前はよくも愛犬を殺してくれたな」

「殺してなんかいませんよ。偶然です」

しらっと嘘を吐きます。

「信じるわけ無いだろう。貴様の眉間にも五寸釘を叩き込んでやる」

金槌と釘を構える正直爺さんを見て、パルスィは駆け出そうと準備をします。

今まさに大地を蹴って我が家へと逃げ帰ろうとした時、正直爺さんの懐から何かが転がり落ちます。

パルスィは目を見張りました。

この爺は輝夜と結婚でもするつもりか……。

地面に転がるのは神宝。

蓬莱の玉の枝がきらきらと光っています。

「どこでそれを手に入れたのですか？」

「冥土の土産に教えてやろう。貴様等が殺したシロをわしは埋めた。埋めたところからにょきにょきと木が生えてな、邪魔だったから切って臼にしたんじゃ。その臼から出てきたお宝じゃ……死ねい！」

「だから！犬で失敗したから次こそ。ね？」
命からがら逃げ帰ったパルスィはまたお爺さんを説得します。
正直爺さんだけが幸せになるなんて絶対に許せないのです。
「じゃがな……」
反論の隙を与えずに能力を発動させます。
２０分後、鬼のような形相でお爺さんは臼を抱えて戻ってきました。
背中には鉈やら釘やら鋸やら、色々刺さっていますがパルスィは特に何も言いません。
「さあ、早速搗いてみましょう。きっと財宝が出てくるに違いない」
杵と臼がぶつかる度に溢れ出る汚水や汚泥の汚物の数々。

この糞臼が

怒りのあまりパルスィは魔法の臼の現状を的確に表現してしまいました。

「ごめんなさい正直爺さん。臼は身を焦がす恋の炎で燃え尽きました」
直接顔を合わせると殺されそうなので裏口に、臼の灰と書き置きをそっと残してパルスィは家に帰りました。

～数日後～
何やら外が騒がしいです。
何事かとパルスィは外に出ました。

道端に立ち並ぶ枯れた桜の木の上で大騒ぎをしている奇人が目に留まります。
正直爺さんです。
臼を燃やされたショックで気が触れてしまったのでしょうか。
「枯れ木に花を咲かせましょう！」
桶に入れた灰を狂ったようにばら撒いています。
「お爺ちゃん、お爺ちゃん！とうとう正直爺さんが狂ったよ」
お爺さんを家から引きずり出したパルスィは信じられないものを見ます。
茶色の枝だけだった桜並木が満開なのです。
季節は冬。
まだ雪もちらつく今の季節に満開の桜です。
お爺さんもパルスィも口をぽかんと開けています。

きっと正直爺（あのやろう）さんはこの灰で起こす奇跡を大名にでも見せてたんまり褒美を貰うつもりに違いない。ああ妬ましい。何としてでも阻止しなくては。

「あら、こんにちはお隣さん」

白い日傘とチェックのスカート。
正直爺さんと暮らしている幽香さんです。
「あら、幽香さん。こんにちは」
「あなたの考えている事は分かるわ。犬も臼も台無しにして、この灰まで奪うつもりでしょう？」
表情こそ穏やかなものの、幽香さんから並々ならぬ殺気が滲み出ています。
「でも残念ね。あの灰はただの灰。花を咲かせているのは私の能力よ」
幽香さんが地面を指差すと可愛らしい福寿草が顔を覗かせました。

思わずパルスィが福寿草に視線を落とすと……また殺気。
慌てて飛び退くと、隣に居たお爺さんの顔に灰がかけられます。
いつの間にか木から降りた正直爺さんがこちらを睨んでいます。
「枯れ木に花を咲かせましょう！」
正直爺さんと幽香さんが同時に叫びます。
「うっぎゃあああああ」
「ひっ」
お爺さんが顔を押さえてのた打ち回ります。
指の隙間から生えてくる色とりどりの季節の花。
手の下の顔を想像したくありません。
「枯れ木に花を咲かせましょう！」
正直爺さんが灰を投げます。
「いやあああああ」

「……これが私のスペルカード『花咲爺「シロの灰」』誕生秘話よ」
「絶対当たりたくないぜ」
地下６６６階。
逆さ摩天楼で魔理沙とパルスィの弾幕ごっこが開始される……。

（後書き）

感想よろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9172j/

昔　話　パル　スィ

2010年10月28日02時52分発行